2011年10月10日 中日新聞 朝刊 33頁

備える 3.11から　第18回　避難所の誕生③

東日本大震災の発生直後、東北三県では多い時で千八百カ所の避難所に五十万人が身を寄せた。見も知らぬ人同士が極限状態で集まる避難所は、必ずしも順調に運営されたわけではなかった。避難者たちは当時を振り返り「恥ずかしい話だけど教訓になるなら」と、避難所の裏側を語ってくれた。（沢田千秋）

もめ事続出 疲弊する心

石巻・門脇中

「声が大きい者」強く

震災当夜、宮城県石巻市の門脇中学校体育館には、千人近い被災者が押し寄せた。ぎゅうぎゅう詰めで、みな、ひざを抱えて座るしかなかった。停電による暗闇で「年寄りはトイレが近いから隅っこへ行け」「足を踏むなあ」と怒号が飛び交う。雪が降る中、体育館に入れなかった人はトイレ内でうずくまった。幼い子の泣き声が一晩中響き、学校中が殺気立っていた。

避難者の一人、山内秀頼さん(52)は「こりゃいられないと思って親戚や知人んとこ行った。一カ月も居候すると結局、避難所に戻るしかなかったけど、妹は避難生活の疲れで心を病んで入院した」と語る。

門脇中の臨時職員、宇都宮雅博さん(54)も「以前はピンピンしていた母が、寒い避難所でずっと身動きが取れず、震災の三日後には一人で歩けなくなった」と打ち明ける。四月七日には敗血症で死亡。せっかく生き延びても、震災のストレスに耐えられなかった人は多かった。

中学一年の菊地未准(みのり)さん(12)は、津波から逃れてJR仙石線の線路上で一夜を明かし、門脇中に避難した。それから三日間、一度もトイレに行かなかった。「水が流れず、汚いトイレに行くのがいやだった。飲み物も食べ物もできるだけ取らず、体も動かさないようにして我慢した。めちゃくちゃおなかが痛かった」と、まだあどけない顔をゆがませた。プールの水をトイレに流すようになって、ようやく行けたという。菊地さん一家は四カ月間、調理室で寝起きする生活を続けた。

門脇中の教室でリーダーを務めた中島洋明さん(62)は「もめ事の一番の要因はスペースの広さと位置の問題。みんな風通しがいいところや温かいところに行きたがった」と振り返る。

教室内にいびきがひどい人がいて、周りの安眠の妨げになったことがあった。中島さんは本人以外の全員を回り、「絶対に面と向かって『うるさい』と言っちゃいけない」と諭した。直接、注意すると「同じ避難者なのに偉そうに」とトラブルが起きやすい。ボランティアや市職員など必ず第三者を通して注意し、避難所の平穏を保つ努力をした。

門脇中では率先してリーダーになる人が少なく、主に年長者が選ばれた。中には、倉庫にある支援物資を自分の好きな人や協力的な人にだけ配るリーダーがいた。見かねた市職員が倉庫の鍵を管理するようになり収まったが、その後もこっそり物資を取り出して分配していた。ある避難者は「人気取りのためにそこまでやるかとあきれた」と憤る。

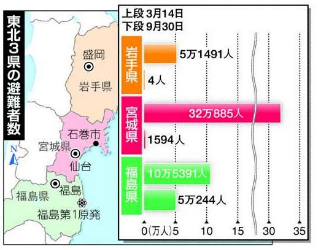
市内の別の小学校では、学校生活と避難所の共存の難しさが浮き彫りになった。授業が再開すると、子どもたちの声を「うるさい」と怒る避難者がいた。

一方、女性教諭は「給食が再開したばかりで、子どもたちは牛乳とパンしか食べられない中、避難所から炊き出しのいい匂いがしてきた」と話す。炊き出しを給食にすることは食品衛生法に抵触する。「おまけに、余った食事を捨てているのも見せられ、子どもたちには気の毒だった」

「避難所では、声が大きい者、強い者勝ちだった」と中島さん。怒鳴る人がいると、子どもや女性、お年寄りはびっくりしておびえていた。小さい子どもがいる家族は数日間で次々と出ていった。

「極限状態の団体生活という意味では、戦争中とおんなじだよ」と話し、自戒を込めた。「すべてのトラブルは個人のわがままに尽きた。二、三人だけじゃ怖くて言えなくても、みなで団結すれば立ち向かえたかもしれない。その勇気が必要だった」

一時は1000人近くが身を寄せ、怒号が飛び交った門脇中学校＝3月、宮城県石巻市で



住民自ら「避難ビル」探し

津、震災後活発に

緊急津波避難ビルに指定した病院の前で語る中川さん＝津市乙部で

未曽有の津波被害が起きた東日本大震災を受け、伊勢湾内に面し、津波への危機意識が比較的薄かった津市で、住民が民間ビルを避難所に登録する動きが活発化している。

「今でも東北のような津波は来ないだろうと考えてしまうが、万一に備えることが大切と思うようになった」。津市敬和地区自主防災協議会の中川幹夫会長(76)が震災後の心境の変化を語る。

東海、東南海、南海の三連動地震が起きた場合、国の中央防災会議のマグニチュード(M)8・7の想定では、地区の津波浸水時の深さは防潮堤が倒壊しても一メートル以下。津波の避難訓練はめったに行わなかったが、三月の震災で変わった。

地区は低層住宅が密集し、高齢者が多い。長距離の避難が難しい住民のため、自主防災会がビル所有者に「万一の駆け込み先にさせてほしい」とお願いに回っている。二階建て住宅が浸水すると想定し、三階建て以上の病院やマンション、駐車場など十一棟で同意を得た。「目標の二千人分の避難スペースは整った」と胸を張る。

津市の沿岸部では、自主防災会が競うように避難ビルを探す動きが広がり、津市役所が指定した九棟を超えた。行政は「二十四時間、常に開放できること」など指定条件が厳しいのに対し、自主防災会の要請は「できる範囲での開放」。日ごろの付き合いを生かし、協定書を締結せず口頭の約束にとどめるケースもある。

津市は現状の九棟で、M8・7を想定した浸水区域の人口六万人のうち、目標の三万人のスペース確保は達成したと説明する。ただ、三重県が三日に公表したM9・0の巨大地震を想定した調査では、浸水区域が大幅に広がる恐れがあり、さらに避難ビルが必要となる。市防災室の担当者は「津波はとにかく遠くへ逃げることが大切だが、必ず逃げ遅れる人が出る。住民と連携し、避難ビルを増やしたい」と話している。

（鈴木龍司）

次回は、外国人の避難について考えます。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2011年10月10日 中日新聞 朝刊 33頁

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています